RPG　―あ～るぴ～ぢ～―

Ｋ Ｒ Ｉ Ｎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＲＰＧ　―あ～るぴ～ぢ～―

【Ｎコード】

Ｎ０２８１Ｉ

【作者名】

ＫＲＩＮ

【あらすじ】

普通の高校生天童ヱ弐駆（てんどうゑにく）はある日の図書室でとある少女に出会ってしまい……

【プロローグ　はじまりなんてこんなんでいいだろ】（前書き）

超てっきとう

【プロローグ　はじまりなんてこんなんでいいだろ】

俺の名前は天童　ヱ弐駆（てんどう　ゑにく）、日本中のどこにでもいるような一介の高校一年生の男子だ。
目立つわけでもない、クラス委員長でもないそもそも委員会にも入っていない。
なんの部活にも入っていない、しいて言えば帰宅部。
父さんは普通の会社員で母さんも専業主婦、あくまで俺は
「普通」
ゲームばっかりやって、遊んでばっかで勉強ができない、その辺にいるごく普通の高校生だ。
彼女もいない、学校ではいつも同じ仲間とつるんでは適当なアホ話で盛り上がっている。
それが俺の日常だった。
変わってしまったのはある日の図書室で、あいつと出会ってしまってからだ。

その日の放課後、俺は学校の図書室にいた。
図書室で何をしていたかなんて言う必要はないだろう。
読書だ
……。
なぜ、俺が図書室にいて、図書室で必然的にやるような行為をしていたのかと言うと、俺にはシナリオライターになるという立派な夢があるからだ。
そのためにはいろいろとストーリーを知る必要がある！！
だから、俺は読書をしていたのだ。……現実味のない夢だとは分かっている。
ただ、どこか自分の人生に刺激がほしいだけなんだ。

しかし、人生と言う物は上手に出来過ぎている。
刺激がほしいから、なんて理由で何もかもがかなうわけじゃない。
彼女がほしいとか、そんなことさえ叶わない。ギャルゲーのように恋がはびこるわけでもない。
俺にとってはそれが「人生」なんだと、言い聞かせているのだ。
ただ、この日に一つだけ、たった一つの刺激が俺に舞い込んできたのだ。
「あのぅ……。」
俺は読んでいたライトノベルから目を離し、
少女の声が聞こえてきた方を見た。
「ヱ二駆……さん……。」
この不安に怯えるような弱弱しい表情の少女。
彼女の所為で俺は良く分からない「刺激」に巻き込まれていったのだ。

【プロローグ　はじまりなんてこんなんでいいだろ】（後書き）

こんなんですいません。

第一話　物語の基本は問題児だ（前書き）

続編です。

第一話　物語の基本は問題児だ

「ヱ弐駆……さん……。」
少女は言った。俺の名前を、マイネームを！！
俺はこの少女を見たことがある。
身長約１５０センチ、まるでアニメのキャラクターのような不規則に整えられたショートヘア、でも活発そうな感じではなく、控えめな感じだ。
そして顔。こいつは……猫のように愛くるしい童顔、自己主張の激しい大きな目、それとは対照的な小さな鼻、淡いピンク色の唇。
そして、ちょっと手入れ不足ながらも絶妙な太さを維持している眉毛。紫外線を当たっていません的な白い肌。
二次元のキャラクターを見ているような錯覚に陥りそうなぐらいの美少女、これでメイクなしってのがすごい。
名前を　新田（にった）　真貴菜（まきな）同じクラスだったはず……
と言うのも、彼女を見る機会が少ないため覚えていない。
不登校、今日は久しぶりに登校していたような気がしないでもない。はっきり言ってこいつにはあまり興味がない。かわいいとか思うのは別に、こいつと一緒にいたい、つまり友達になりたいとはあまり思わないな。女子としゃべるのは苦手だし。
なぜ、こいつが俺に話しかけてきたのだろうか？
「あ、あのぅ……。」
ついうっかり、俺は新田の顔をガン見していたようで、新田は顔を真っ赤にしながら若干泣き目になっていた。
「…なんか用？」
我ながら思う、この態度は冷たかったと。
ひうっ、と新田が声を漏らしていた。俺はこの一発で嫌われたに違いない。
なんて冷たい人なんだ、せっかく一人で寂しそうに読書していて哀

愁漂う背中丸出しのブ男に声をかけてやったのに、なんだこの態度は、こいつ心の中までブ男なのか。
とこれぐらいは思われているに違いない。…なんだか俺は妄想上でもブ男のようだ。
「あ、っと、えっとぉ……。」
うろたえ始める新田を尻目に、俺は読書に戻る。キスシーンの真っ最中なんだから気になるんだよ。
「と、隣、いい？…です…か？」
新田はそう言った。断るか？……隣は一応空いているけど、いや、俺には断る理由がないじゃないか。どこに座ろうがそれは個人の自由、それを妨げたら人権侵害になりそうだ（多分実際にはならないと思う）。
「いいよ。」
なんか、またちょっと声を低めにして言っていたような気がする。冷たい態度、だったかな。
ぽふん、と隣の椅子に新田が座った。
「……。」
新田は何もしゃべらない。ページをめくる音だけが二人の間に流れる。
俺は横目に新田を見ると、
「……！？」
目があった。新田は顔ごと目をそらした。俺はその様子をじっと見る。そこで気付いたのだが、俺は睨むように新田を見ていたのかもしれない。…そのせいか、空気はさらに気まずくなった。
まぁ、いっか。なんて思えるわけがない。この空気をどうにかしないとな、気まずいのは嫌いだ。
今度はちゃんと顔ごと新田の方を見る。
新田は顔をうつむかせている、この様子からどうやって話を発展させようか……。
「……ん？」

なんだか、新田を見る限り図書室っぽさが見当たらない。
「なぁ、本…読まないのか？」
新田は本を読む以前に本を持っていなかった。
「ひうっ！？……へっ！？」
俺が言ったことに頭を動かして辺りをキョロキョロと見回すという反応を見せる新田。
本がない、ということがこの場所にとっては不自然であるということに気付いたのだろう。
新田は立ち上がり本棚の方へと歩き出した。
三秒後、
ビターン！！と、大きな音がした。
ばっちり新田が転んでいた。前のめりになってこけている。手をつくこともできなかったようだ。図書室中の生徒達が新田の方を見ている。
「……。」
「大丈夫か？」
なかなか立ち上がらない新田が心配になってきたので近寄ってみる。
「おい、立ち上がれるか？」
俺は膝をついて手を差し出す。
のそっ、と新田が体を起こす。
「……うぅ…。」
鼻が赤い、眉が垂れ下がって、目には透明な水のような液体が……
へっ？
「…ううぅ、うわあああああああああん！！！」
「…はっ？」
新田は大声を上げて大泣きし始めた。あろうことか静かにすべき図書室で。
「うわあああああああああん！！！」
「ちょ、どうした？っていうか、な、泣くなとりあえず。」
し、視線が集まっている、レーザーみたいに痛い視線が。

「…な、なぁ。新田？」
ガバッ！！
俺が新田の目の前にいった瞬間、新田は俺に抱きついた。
「ちょ、なにやってんの！？」
泣き声はどうやら俺の胸で泣け、的な感じになっているおかげである程度セーブできているようだが、他者からの視線が集まりまくっている！！
「ちょ、ちょおおおい！！新田、と、とりあえずは離れてくれ…。」
ズル
「あれ？その音はまさか！？は、鼻水だけはつけないでくれ、制服洗わなきゃならなくなる！！は、離れてくれ！！」
「うわあああああああああん！！！！！」
「あああああ！！なんか泣き声が大きくなった気がする！！！なんでだ！！」
いっこうに泣きやまない新田。

「俺に、どうしろって言うんだーーーー！！！！！！！！！！！！！！」
俺の声は、教員室にまで届いたという。

俺は新田が泣きやんだ後、

図書室の先生と担任教師により、「図書室で大声を出さないこと」と「女の子を泣かせないこと」の二つについて厳重な注意を受けたのだった。

第一話　物語の基本は問題児だ（後書き）

何かすいません。

第二話　題名を考えるのがこの上なくだるい

図書室での一件が起きた後のことだった。俺は帰路についていた。担任教師と図書室の先生からのお叱りを受けた後にわざわざ事件の現場である図書室に行く気は起きるわけもないので、俺は帰る以外に何もやる気が起きなかった。
ただ、いつものように帰る道、その中に橋があった。川を挟んだ一対の岸に架かる一本の橋。
いつもは何気なく一切気のならない橋に、今日は目がとまった。
俺はこの時点で橋から数メートル離れているところにいて遠目で見ていた、その橋の上の様子が目に入ると、俺は歩みを止めてその様子をじっと見ていたのだった。

橋の上には四人の女子高生がいた。全員俺と同じ学校の制服を着ているので、俺の同級生か先輩だろう。
その中の一人は同級生、

新田　真貴菜だった。

あとの三人はあまり見覚えがない、先輩か他クラスの女子だろう。髪を金や茶色に染めていたり、厚く化粧をしている。それでも俺的にはそんな彼女たちよりも一切化粧をしていない新田の方が可愛く見えるのだが…。
それはそうと、その四人の女子たちの様子が変だった。
この辺には車も通っていないし、今日は風が吹いていないので、彼女たちの会話もクリアに聞こえてきた。

「あ、あのぅ、……これ、買ってきた。」
新田は持っていた何かが入っているだろうどこかの店の袋を差し出

しながら俺に話しかけてきたときのようなおどおどした弱弱しい声で厚化粧女子の一人に話しかけた。
「ちょっと、「買ってきました。」でしょう？」
その一人は新田と対照的に強気なようで、新田が差し出した物を奪い取るように受け取って圧をかけるように新田に言った。
「あうぅ。……すいません。」
律義に新田は誤った。こんな奴にあやまる必要なんてないのに。
「…へぇ、ちゃんと頼まれたものを買って来たのね、じゃあもう帰っていいわよ。」
中身を確認しながら言った。手を払って猫に「あっちけ！」と言う時に使うジェスチャーをしている。でも、新田はちょっと戸惑うけれどその場にとどまった。
「もうあんたに用はないって言ってるでしょ？早く帰りなさいよ。」
「…あ、お…お金…。」
新田は細々と言う。
「…お、お金、返して…。」
まるで告白でもするかのように意を決して新田は言った。
多分、パシリに使われてさらには自分の金を使わされたのだろう。
「はぁ？なに言ってんのよ、こんな安いもんの一つや二つおごりなさい。」
うち一人が逆ギレすると残りの二人もそれに便乗する。
「……で、でも、それ高かった…。」
「あんたには高くても私たちには安いのよ。」
「…そ、そんな…。」
「ケチケチすんじゃねぇっての。」
「……でも…。」
「なに？あんた口答えするって言うの？」
なんだか理不尽なことを延々と言っているような気がする…っていうか言っている。
それでも、まだ新田はおどおどしているし、俺はただ見ているだけ

だった。
「お金…返して……ください。」
新田は言った。これが絶対に正論だろう。それでちゃんとこいつらは新田に金を返すのが正しい行動なのだろうが、
「まだ言うか、お前は！」
一人が怒鳴りつける。
「ひうっ…で、でもぉ…。」
新田は自分の意思を決して曲げない。それが正しいことだと信じているからだろう。
「…っ、いちいち反論すんじゃねぇよ！お前はパシられときゃいいんだよ！！」
「…ひっ。」
また怒鳴る、それで新田はさらにびくびくと怯える。
「こいつ、落とすぞ。」
はっきりとそう聞こえた。落とす？……俺はそれがいったいどういうことか分かるまでに時間がかかってしまった。
「…えっ！？」
新田は驚いていた。それもそうだ、新田は三人の女子に持ち上げられていたのだったから。
「…まさか……。」
俺がこの三人が何をしようとしているのか分かった時、俺は何をすべきか、そんなことも考えずに止めていた足を動かし始めていた。
でも、遅かった。
三人は新田を持ち上げながら橋の手すりの方へ移動する。かすかに新田が「やめて」と言っている。そして、そのまま…
バシャーーン！！！
と、新田を川に放り投げた。川が深くて、橋もあまり高くなくてよかったと思う。

水の中に沈んだ新田が少しずつ浮かび上がってくる。
俺は何とか橋のところまで辿り着いた。
橋の上で三人の厚化粧が新田を見て笑ってやがるのが腹立つ…。
「ぷはっ。」
新田が顔を水上に出した、でも、その様子を見ると泳げていないようだ、見た感じ溺れている。
「おい！！何してんだ！！」
俺は笑う厚化粧どもに怒鳴る。
「ん？何？あんた、私たちの遊びに口を出さないでくれる？」
このバカ女どもはバカにするように言った後さらにバカ笑いをする。
「これの、どこが遊びなんだよ！！！」
どうせこのバカどもからまともな返答が返ってくるわけでもないので俺は新田の方を見た。
手をバシャバシャと水に打ち付け、悶えるようにしてやっとのことで浮かんでいる。ところどころでけほんけほんとむせるように咳をしている。
「おい！！大丈夫か！？」
「けほっ、え、に…く……けほっ。」
また、頭が沈む、どうすべきか……、なんて考えてる時じゃあねぇよな！
俺はブレザーを脱ぎ、靴と靴下も脱いで鞄を投げ捨てて、手すりに乗り、
「ちょ…なにする気…ぷっ、まさか？」
笑うバカどもなんかほっといて、

ダイヴィング！！！！

バシャーン！！

俺は水中で態勢を立て直し、新田の方に向かう。新田はさっきと同

じようにバシャバシャさせている。俺は新田を抱きかかえる。
「おい！大丈夫…か？」
若干今にも俺は沈みそうだ。立ち泳ぎは慣れていないから当然だろう。
抱きかかえられていて、体を支えられていることに気付いた新田が動きを止める。
「ヱ二駆…さん…。」
べっとりと顔に張り付いている髪、今にも泣き出しそうな顔で俺を見る新田。
「大丈夫、今、上げてやるから。」
俺は新田を抱きかかえながら、少しずつ、少しずつ近くで登れそうな岸を見つけてそこから新田と一緒に陸に上がった。

バカ女どもはいつの間にかいなくなっていて、俺達はびしょびしょのまま帰ることにした。
さすがに、これで風邪をひかせるのはまずいだろうから、俺はブレザーを新田にかけてやった。
遠慮しようとする新田に「気にするな。」と声をかけてやるとそのままブレザーをはおり、顔を真っ赤にしながら
「あ、ありがとう…ございます。」
と言った。熱、出てないよな。

そのあとで俺たちは家に帰った。
俺はその辺のテキトーな借家に住んでいて、その近くのマンションに新田は住んでいるという意外にご近所さんであることもついでに知った。

それから数時間後、俺は自分のベッドに寝転んで天井を見ていた。
今日のことを思い出していた。
新田の様子を思い出すと、新田はいじめられているのだろう。

でも、引きこもりがちなあいつにはあの三人以外に話せる相手もいなく、言うことを聞かざるを得ない状況なんだろう。
それと、俺はあの様子をただ見ているだけだった。
見ていることしかできなかった。
もし、あそこであの四人のなかに割って入っていたらどうだっただろうか？
自分は何もできなかった。
それがとてつもなくもどかしい。

最後に、一つだけ分からないことがある。
なんで、

なんで新田は俺に話しかけたのだろう？

話しかけられるようなことをした覚えはない。あいつと話すことでさえ今日が初めてだったのだから。

「ふぅ、気にしていたって、何にもならないな。」
そうだ、気にする必要なんかない。
それでも気になるのなら次に新田と出会ったときに聞けばいいだけだ。

どうせ明日もなにも変わらない平凡な日常になるのだから。

第二話　題名を考えるのがこの上なくだるい（後書き）

本当に申し訳ない。

第三話　やっとタイトルらしい展開に…

俺は寝た。
あの後すぐに寝た。何時間寝ていたのだろうか、当然だが時計を見ないと実感は湧かないものだが、
目を覚ました瞬間に朝になったのだと気付いた。
目に飛び込んできたのは
突き抜けるような快晴の青空だった。
……なぜに？？？？？？

あれ？これは一体どういうことだ？一体全体この状況はどういうことなんだ、
誰か、今のこの様子を数式でも何でもいいから説明することのできる人がいたら出てきていただきたい。
…さて、そろそろ起き上がって辺りを見ますか。
視界に広がるのは辺り一面の草原、草原、草原、草原、……。
一体ここはどこだ？
俺はこんなところに見覚えはない。あったとしてもこんなところで寝ているわけがない。
俺は部屋で、自分の部屋で、自分のベッドで寝ていたはずだ。
なんでこんな見渡す限りの草原で俺は寝ていたんだ？
っていうか、いつの間にこんなところに来たんだ？
頭はこの状況に対して疑問を突き付けるだけだ、ここで何か冷静な判断をしてこれがいったい何が起こっているのかを確かめ……。
夢か…。

そうだ、それ以外にあり得ない…、のだがなんか違う気がする。
ここで「夢だ！」と言ってほほをつねってとしてもこれが夢じゃなくて現実だ！
と思うのが一通りのお約束、なんだかそれだと思う。
とりあえずそのお約束も試した方がいいだろう。
「……痛っ…。」
予想通りだな。
でも、今この目の前に広がるものが現実であるということがこんなくだらない方法で証明されたとは思いたくない。
ガキのわがままがいつまでも通じるわけがないように、こんなお約束がいつまでも通じはしないだろう。
ま、今のところはこの世界が
「現実と夢の狭間」にあると考えるのがベストだろう。

「さぁ、ここからどうする？」
実際、そっちの方が重要だな。このままじっとしていたら現実世界に帰るどころか命にまで影響を起こしかねない。
でも、何をしようか。
俺がそんなことを考えていたときに、ふくらはぎ辺りになにか柔らかいものが当たった。
「…？」
ふくらはぎに当たったものはなんだろう。
当然だがそう思えば足元に目をやる、そして俺はみつけた。
「……これは…。」
まっ白い球状の形をした顔だけがあって、その顔が笑っている。
ただ、これが人間ではないことはすぐに分かる。
人間味のない、誰かに作られたような顔、そして明らかに見たことのない生物、
実物としては。

俺はこれに見覚えがある。ただ、今見ているこれのように立体感はなく、テレビのディスプレイに表示される二次元上のものだ。
とあるＲＰＧゲームのスライム。
「なんでこんなもんがいるんだ？！」
柄にもなく叫んでしまう。なんなんだよこれは！！？
なんだか知らない変な場所にいると思ったら今度はＲＰＧのモンスターですか、
これはもうどうしたことか。
ぴょん、とスライムが跳ねた、そしてそのまま見下げている俺の顔面に体当たりした。
「…痛ッ！！」
っちっくしょう！柔らかいくせして意外と痛いじゃねぇか！！
「食らいやがれっ！！」
着地した瞬間のスライムをサッカーボールみたいに蹴ってやると、意外と重量があったけど小学生のロングシュート並みには飛んだ。
ぽよん、ぽよん、とバウンドするがまたこっちを向く。
「ちっ、やっぱり決定打にはなんねぇよなぁ。」
ここでどうすべきか、そう考えながら一歩足を大きく下げると、カシャン、と音がした。それは俺がなにかを踏んだためになった音で、それを踏んでしまったがゆえに俺は後ろにすてんと転んでしまった。
「あーもう！！さっきから痛ぇばっかじゃねぇか！！」
俺は体を起こしながら足元を見ると、
そこには一本の剣があった。
……はぁ？
……そうか、分かった。

俺は、ＲＰＧの世界に何かしらの方法で来てしまったんだ。そして、なんだかこんな状況は一度だけ見たことがある。
草原で寝ていた一人の剣士が目覚めると同時にスライムに襲われるというプロローグから始まるＲＰＧ。
俺はこれをやったことがあるから分かる、そしてその剣士こそがのちに勇者と呼ばれて魔王から世界を守る主人公、

それが今の俺だ。

……つーことは、俺に勇者を演じろってことか？
はぁ、良くわかんねぇ。なんで俺がそんなことをしなきゃいけないんだ？
飛んで行ったスライムがこっちに跳ねて迫ってくる。
「まぁ、いいや。せっかくだ。一度でもゲームの主人公になれるってことだろ？」
俺は剣を手に取る。

「そいつはかなり「刺激的」じゃねぇかよ！！！」

俺はそう叫んで跳んできたスライムを切りつける。切りつけたスライムは「ふにゅう」と鳴き声を上げて動かなくなった。
「はぁ、なんでこんなことになってんだよ。」

この時の俺は知らなった、これが誰の仕業だったのかを。
そして、俺は忘れていた、寝る前に起っていた出来事を。

新田　真貴菜という存在が俺の眼中に入っていなかったのだ。

第三話　やっとタイトルらしい展開に…（後書き）

本当に申し訳なさゲ。

第四話　結局こんな感じです。

このＲＰＧはかなりの王道だった。
勇者は目覚めた後すぐに最寄りの王国の王宮に行き、そこで魔王の退治を依頼され、
たった一人の仲間である王宮魔法使いを連れて旅に出る、
それがこのゲームの導入部分だった。
つい最近に買ったクソゲー、俺は今そのクソゲーの主人公である勇者として導入部分を進めている。
「ったく、よりにもよってこのクソゲーとはなぁ。」
俺、天童　ヱ弐駆はこのゲームをクリアした後すぐに売った。
３００円という超安価で取引された。なぜならこのゲームはかなりの不人気で、さらにはぼったくりだと世間的に非難されていたからだ。
……なんで俺はそんなゲームを買ったんだ…。
でも、一番の謎は、なんで俺がここにいるのかだ。
過去の愚行を悔やんでいたって仕方がない。
でも、こういう世界に来てしまったときはその世界でのやるべきことをクリアしてしまえば、
元の世界に帰ることができると言うのが「お約束」なのだ。
なら、俺は今できることをやればいいんだ、気に病むことなんかないさ。

そんなことを考えながら歩くこと約２０分、俺はスタート地点から最寄りのとある王国に到着した。
ゲーム上なら２０秒もかからなかったのに……。
とりあえずはここから何もかもが始まるんだな。
もし、今すぐに元の世界に戻れるって言われても、俺はこの先に進みたい。

結構楽しそうだし、何よりも「非現実」っていうのはこの上ない刺激だし、最高に楽しもう。
とある王国の城下町へ、一歩先に進んだ。
城下町は賑わっていた。
ゲーム上とは違って結構たくさんの人がいる。
西洋風の建物がたくさん立ち並ぶ街の中でひときわ目立つ宮殿、この国の王が住む王宮だ。
「ところで、あそこにはどうやったら入れるんですか？」
と街の人に聞くと、
「ここは城下町です。」
や、
「王様はとても素晴らしいです。」
と、プログラムされたように決められたことしか言ってこない。
「やっぱりゲームなんだな…。」
痛感した。多分、人生で初めて痛感したと思えた瞬間だっただろうな。
王宮の門の前には門番がいた。うん、いなかったらどうしようかと思っていたところだ。
門番に話しかけると
「ここに入るのは自由だ。」
と言ってくれた。無機質な表情が怖い。なんだかゲームの主人公はこんなに冷たい扱いを受けていたのかと思うと、主人公は相当心が強くないとやっていけないんだな、と思った。
俺にはきついよ。

王宮に入ると俺は真っ先に王座の間に行った。普通のＲＰＧはここでいろいろとあさってアイテムを探し出すのだが、このゲームにはその概念がなかった。
なぜかって？これはクソゲーだからだ。
王座の間には王様がいた。

「おぬしは一体誰だ？」
王はそう問うてきた。
「勇者です。」
……多分。
「そうか、お前が魔王を倒すことのできる勇者と申すのだな！」
「はい。」
「では、お前に魔王を倒す命を与えよう。世界を救ってくれ！」
お前は何様だと言いたいが、残念ながらこいつはそれを言い返せる。
王様だと。
「では、お前の旅のお供を授けよう。」
そう言って王様は手を二回叩く。
どうしよう。この王様や国の人たちみたいに凍ったような無機質な態度の人だったら……
考えただけで気が重くなる。
俺の後ろの方から足音がする。今この部屋に入ってきたのだろう。
「…お、お呼び……でしょう…か。」
その声には感情があった。この世界に来てから俺以外の声では初めてだった。
おどおどしていて、不安を形にしたような感情が響いてくる。
……あれ？この声、どこかで聞いたことがある……。
足音は進み、俺の前、そして王座の前につくと、その足音は止まる。
目の前にいるのはローブを着たいかにも魔術師だといえる格好の少女。
「お前は彼とともに魔王を倒すのだ。」
「…は、はい。」
彼女は振り返る。
「ヱ、…勇者様、よろしく……お願い……します。」
新田　真貴菜だった。
「お、お前！！」
「ひうっ。」

俺は顔を見るなり叫んでしまい、新田の目をうるませてしまった。
「なんでここにいるんだよ。……とりあえず、怯えなくていいから、驚いて声を上げてしまっただけだ。」
「……ひぅ…はい……。…分かり……ません。」
やっぱりな、と言っておこう。
「当然さ！！真貴菜がなにか知っているなんてありえないことだぜ！！」
第三者の声がした。
「誰だ！？」
俺は辺りを見回す。
「おうおう、俺の姿が見えてねぇのか？そいつはお前の心がドブネズミの死骸のカスより汚いからだぜ！！」
声の方向を見ると、新田の方だった。
声は新田じゃない……あれ？
俺は新田の肩のあたりを凝視した。
何やら顔をうつむける新田の肩の上に
小さな見た目３０前後のゴスパンクの格好をした中途半端おっさんがいた。
「何コレ！！？」
俺はまた叫んだ。言う必要はあるか分からないけれども、新田は「ひうっ…。」
と言っていた。
「何とは物扱いですか。こいつはひどいひどい、ひどいよなぁ。」
「だから、お前はなんだ！！」
新田は（ｒｙ
「俺かい？俺は妖精さ！」
お前が妖精だったらゴキブリも妖精に入るぞ。

「俺は妖精…恋する乙女の味方……。気持ちも言えない乙女の味方。」
こんなのに味方されたら恋愛は成就し無さそうだ。
「で、なんでそんなのがここにいるんだ？」
俺がそう聞くとこの「ゴキブリ＋妖精＝精」の変な生物ではなく、新田が驚いていた。目を見開いてまさに「ビクッ！」と背筋がのびた。
「…おうおうおうおう。ここまで言って気付かねぇとは…要するに真貴…」
新田が妖精の口を塞いでその言葉を断じさせた。
「…な、なんでもない。」
新田が焦っているのを初めて見た。これはこれで新鮮だ。
「けっ、まぁいい。とりあえず俺もこの旅に同行してやる。」
「しなくていい。」
「おい！！！」
「ひぅぅぅぅ。」
ここから俺たちの旅が始まった。

その日の夜
俺たちは城下町を離れ、一つの小さな村に辿り着いた。
日も暮れ、俺たちは宿をとることにした。
しかし……
「相部屋ってどういうことだ…。」
この部屋はベッドが二つあり、シャワールームが一つある安い部屋。
俺は今日ここで女子と一つ屋根の下一夜を過ごすのだ。
ＲＰＧじゃあ何一つ気にならないところだが、実際は違うんだっつの！！！
女子と一つ屋根の下でなにやら卑猥な事件が起こったらどうするん

だよ。
「絶対変な気を起すなよ…。」
俺は肝に銘じた。肝に銘じた。肝に銘じた。肝に銘じた。
ちなみに今、新田はシャワーを浴びている。俺は浴び終えて髪をタオルで拭いて乾かしているところだ。ドライヤーなんてないからな。
こつ、と足音がした。
新田がシャワーを終え部屋に戻ってきた。
「……。」
新田はベッドに黙って座った。
俺は新田を見た。目が合って新田は目をそらす。
「はぁ。悪いな、俺と同じ部屋だなんてさ。」
「…へ？ヱ、ヱ弐駆さんは……あ、あやまらなくて…いいです。」
「交渉はしたが無理だったのは俺だ。謝るのは当然だ。」
「…気、気にしなくて……いいです。ヱ弐駆さんは…。」
「あ、それと、あんまり俺に気を使わなくていいよ。」
へっ？と新田は驚いた。
「敬語とかしなくていいし、俺にそんなの使う必要ないから。」
「は、…うん。わか……った。」
俺はちょっと冷たく言ったような気がしたんだが、新田はちょっと嬉しそうだった。

1時間くらいたつと髪が乾いた。
「そろそろ寝るか。」
手前のベッドに新田が座っているので俺は奥のベッドに行った。
布団に入り、あまり見たことのない蝋燭を消そうとすると、
「あ、あのぅ……。」
新田が声をかけてきた。
「ん？……あっ、真っ暗は嫌？」
新田は首を横に振って
「あの……そのぅ……、い、一緒に……

寝てもいいですか？」

問題発言だーーーーー！！！！！！！！！

「へ？……うん、一緒の部屋で一緒の時間に寝るよ。」
これであってほしい、これであるべきだと思いながら冷静を装って言う。
「……そ、そうじゃあ……な…なくて、……….同じお布団で…一緒に。」
「いや、ちょっと待て、そんなの、認めるわけには…。」
「一人………怖くて……眠れない…。」
うるんだ瞳で、悲しそうに言った。
かわいい、まるで小動物のようだ。
「……でも……いや、それは……。」
目で訴える、顔を真っ赤にして、……大丈夫か？いや、無理、女の子と一緒なんて………
でも、かわいそう。うわっ、もうわからん！！！！
「か、勝手にしろっ……。」
俺は寝返って新田とは逆の方を見た。
俺は言ってしまった。勝手にしろという肯定を。
新田はお構いなしにという感じで潜入してきた。
「…すぅ、すぅ。」
もう寝やがった。
俺は新田の方を向いた。
ちなみにこの世界ではパジャマはスウェットだ。
そんなことはさておき、
新田は子犬みたい、いや、子猫か？ウサギかも……
とりあえず可愛い寝顔で寝ていた。
もしかして、毎日こんな感じなのか？

そう思うと幸運のような気もするが、手を出すことはできない……
神に誓って！！
はぁ。こいつは生き地獄か？

「すぅ、すぅ。」
「……意外と、胸あるんだな。」
俺の視線は新田の胸元にあった。

ちなみに、俺がこの日一睡もできなかったのは言うまでもないだろう。

第四話　結局こんな感じです。（後書き）

なんだか文章がお粗末になってると思います。

第五話　ラスト2話です

あれから一週間ぐらいがたった。
山を越え、谷を越え、草原を駆け抜け、洞窟を突き抜け、村や町に立ち寄り
立ち寄るたびにそこで一夜を過ごす。
毎晩、俺は睡眠妨害を受けていた。
新田が犯人だ。
俺のこの一週間は一時間眠ることができるかできないかの境目だった。
なぜかって？
それはモテない男子君達からは嫉妬の罵声を受けるような幸せな原因だろう。
でも、俺にとってそれは地獄以上の苦しみだった。
新田が毎晩俺と一緒に寝ていた。
厳密にいえば新田が熟睡で俺が仮眠だったが。
新田は寝相が悪く、俺はできるだけ新田との距離を最低限、体が触れないように離しているのだが、
俺がちょっとの間眠っていると……

新田は俺に抱きついて寝ていた。
新田の頭が俺の胸元に押しつけられて、腹部のあたりに柔らかい感触が、髪の毛からは石鹸のにおいか、女の子のにおいなのか分からないいい香りが……。
いや、まて、俺は新田を必死に剥がす。起きようが起きまいが関係ない。
このままじゃ、俺の理性がぶっ飛ぶからな。
意外と睡眠は深いようで起きることはなかった。

これがほぼ毎日、さらに…

俺が仰向けで寝ていると俺の上に乗って寝ていたり
俺の腕を腕枕にして寝ていたり
これは一体どういうことなんだ、と言わざるをえないようなことがよくあった。
おかげで毎日寝不足、そして警戒を解くことのできない夜が続いた。
そして今、

俺たちはラスボスの魔王を倒してしまった。
「……。」
新田は目を見開いて驚き戸惑っていた。
俺も驚いているさ、まさか一撃で倒せるとは……。
「ぐ、ぐわー。」
最後の悲鳴まで感情がこもっていない！！
どこまで機械的なんだこの世界は！？
「へへ、やったじゃねぇか、お二人さんよぉ。かっかっかっか。」
ゴキ妖精がうれしそうに言った。
「…お、……お二人…さん……。」
新田が顔を赤らめてうつむきながら言う。
「まぁ、なんだっていいさ。さ、これでやっと帰れるのか。」
俺があくびをしながらそう言うと、
「え？……。」
新田がショックを受けているような、驚いているかのようにも聞こえる声を上げた。
「いや、もうこの世界にいる理由もないだろうしさ。このゲームは裏面もなかったし、もう充分楽しんだからな。エンディングでも終われば元の世界に帰れると思うし。」
「……そ、そう……だね……。」
なんだか物寂しげだった。

「どうした？……やっぱり、元の世界に帰りたくないとか？」
俺は思い返すと、新田がいじめられていたことを思い出した。
そうだな……新田にとってはいじめられることのないこの世界は居心地がいいのかもしれない。
「…え、……えっと。」
「ごめんな、新田にとってはこの世界は居心地がいいんだよな。勝手に終わらせちゃってさ。お前の事情とか考えてなかった。」
「…そ、……そんな……まだ、か…帰れない……よ。」
「だよな、もうちょっとここにいたいよな。」
「そ……そうじゃ…なくって……。」
「へ？」
新田は、はっとした。良く分からないが口を押さえて顔をゆがませている。
まるで、なにか言ってはいけないことを言ってしまった時のような反応だ。
でも、なんでだろう？
まだここにいたいって言うことは決して悪いことじゃないのに…。
「けっ、さっさと王国に戻ってパレードでもしてもらって盛大に祝ってもらおうぜ、そうすりゃあ、お前らは自由だ！！」
ゴキ妖精がそう言った。
「そうだな、早く終わらせるか！！」
俺たちは魔王の城を後にした。

王国でのパレードは盛大に行われた。
本来ならここでスタッフロールが流れてゲームがジ・エンド、のはずだったが…
そのまま時間が過ぎ、夜になって俺たちは宿に泊まっていた。
いつものベッド二つの安い部屋、そこで二人は無言でじっとしてい

た。

なんで、終わらないんだ？なんで、帰れないんだ？
俺はそんなことを考えていた。
「…ね、ねぇ……、もう……寝よう？」
新田はなにも気にしていないように俺に問いかけた。
「ちょっとだけ夜風に当たってくる。」
俺はそう言ったが、本当は一人で考え事をしたかったための口実だ。
「…じゃあ、一緒に……。」
「あ、すぐに戻ってくるから待っといて。すぐに戻るから。」
念押しに言うと、新田はうなずいてくれた。
俺は新田の頭をなでてやって部屋を出て、宿屋を出て、道の真ん中に佇んだ。

……俺は、俺と新田はなんでこの世界に来たんだ？
ここにいる理由は何なんだ？
魔王は倒した、それがここにいる理由ならばもう俺たちは強制送還でもされて、
元の世界にでも帰ることができているはず……。
なら、他に理由があるとしか考えられない。それがいったい何なのかが、分からないんだ。
ＲＰＧで考えられること……、

魔王を倒し、世界を平和にして、勇者はどうなる？
……ロマンス……？
それなら、姫だか王女だかなんかとするはずだ。
それにこの王国に姫はいない。
じゃあ、なんなんだ？
もっと、もっと考えろ、この世界は一体何だ？
ＲＰＧの世界で、ここにいる住民や魔王やモンスターも機械的で、

人間味がない、感情がなくて、
俺と新田はここに連れてこられた…誰に？
……待てよ、一つ、一つだけなにかを忘れている。
この世界の住民たちはみんなまるでなにかの機械のように感情がなかった。

じゃあ、あの妖精はなんだ？

あいつは少なくとも喜んだり怒ったり、言葉にも起伏があって感情が感じ取られる…

そうだ、そういえばあんなキャラクターはこのゲームにいなかった。

あれは、なんだ…なんなんだ？思い出せ、思い出せ…

「俺は妖精…恋する乙女の味方……。気持ちも言えない乙女の味方。」

そういえばそんなことを言っていた。
じゃあ、あいつが俺たちをここに連れ込んだのか……。
何のために？
それはすぐに分かった。
「恋する乙女の味方」つまり、誰かが恋をしているんだ。
…俺に？なのか？…いや、でもここには俺しか男はいない……へ？

同じ方法で誰が恋をしているのかをあぶってみると……

「新田　真貴菜」こいつしかいない。
つ、つまり……

新田は俺に恋をしているってことか！！！？

いや、待て！！そんな馬鹿な！！！ありえない！！これは被害妄想かただ単に俺の妄想だ！

でも……あ～もうっ！！

こんなことでなに妄想を広げてんだよ。真相を確かめないと……

どうやって？……ゴキ妖精に聞けば分かるだろう。仮にも妖精なんだから。

多分新田は行方を知っているだろうから、ちょっと聞いてくるか。

俺は宿屋に戻って、部屋のドアの前に立った時、

部屋の中から声がした。

俺は手を止め、足を止めて中の声を聞くことにした。

「おいおい、まだこの世界にいる気かよ。」

「……うん……。」

ゴキと新田だ。

「はん、あいつは前と一切変わってねぇ。お前は無意識でも必死にアプローチを寝ている間にしていたみたいだが、あいつはそれをものともしなかった。むしろ、迷惑そうだった。」

「…うん……。」

「まぁ、一人で眠れないのは事実だからしかたねぇが。」

そうなんだ……家ではどうしてるんだ？

「でも、あいつはお前に対して一切の気を見せちゃいない。お前の気持ちを気になんかしちゃいない。言ってないのは仕方ねぇがな。」

「……だから……。」

「ん？」

「だから……あきらめろ……ってこと？」

「まぁ、それがいいのかもしれねぇな。このままこの世界にいたって意味はない。あいつは帰りたがっている。それに、あいつはお前

のことが好きじゃないんだ。」
まるで、代弁しているようにゴキが言っている。
「……そうかもしれない……でも、……でも……。」
新田は声を震わせて言った。
「でも……私の……気持ちは？……私は…私は、初めて……初めて…人を好きになったのに……。

私…ヱ弐駆さんのことが好きなんだよ……。
初めてのことだから……もうちょっとだけ…もう少し……時間をちょうだい…好きになってもらえるように頑張るから…。」
俺は……聞いてしまった。まさかとは思ったが、聞き間違えじゃない。
「はぁ。まあいいだろう。あいつはかわんねぇだろうけど。まぁ、ガンバレや。」
「変える……好きになってもらう……。」
二人の会話は終わった。
どうやら俺の推理（？）は間違ってなかったみたいだ。
でも、俺は知ってしまったんだ、新田の気持ちを…

俺は、新田を好きになれない……。

もしかしたら、心のどこか奥底では「好きなのかもしれない」と思っているかもしれないが、
新田の気持ちを知った今じゃ、それは新田に対しての「同情」になってしまいそうだ。
俺自体がモテたこともないし、告白もされたことはない。
でも、俺がここで新田を好きになったら、それは「嘘の気持ち」になってしまいそうだ。
それじゃあ、俺はあいつを振ってしまうのだろうか？
それが……分からない。

俺は今、あいつのことが好きなのか、それともどうとも思っていないのかが分からないんだ。
だから、どうすることもできない。優柔不断な男だ。
俺はいったん足音を立てずにその場を離れ、今度はわざと足音を立てて近寄って、ドアをノックした。
部屋に入ると、中ではいつものような表情をする新田がいた。

「なぁ、新田。」
布団の中で、俺はいつもよりも比較的に新田に近づいていた。
「…なに……？」
新田は見上げるように俺の顔を見る。
やっぱり可愛い。でも、それが＝好き、にはならない
「なぁ、帰りたいって思うか？」
俺は聞いた。多分、そうは思っていないだろう。
「私は……。ヱ弐駆…さんは……どうなの？」
そうきましたか。
「俺は帰りたいかな。……。」
次に言うことはちゃんと考えなくちゃ、新田を傷つけることになりそうだ。
「元の世界が恋しいから。」
……新田の心に触れないような理由、それは俺の自分の事情しかないだろう。
「……そう…なんだ……。」
新田は悲しそうに、むなしそうに言った。
俺はもう少し、新田に近寄った。
じゃあ、お休み。
もしかしたら、俺がどうにか言えば新田は元の世界に戻してくれるかもしれないと思った。
この世界に俺がいるのは新田が俺に好きになってもらうため、俺と一緒にいるため。

俺がここにいたくないと言ったら、無理にここにいるようにはしない。
新田はそんな性格だ。
俺は、目を閉じて寝たふりをした。
……なんだか、嫌な予感が……なんか、こういう世界に来た時にこんな状況になったら
「キスをして元の世界に帰る」って言うのが「お約束」なような気が……

何分か経って俺以外のなにかがもぞもぞと動き出した。
そのなにかは新田だ。
新田の吐息の音が聞こえる。近い、近いぞ……。
いや、まて、まさか、「お約束」をする気じゃあないだろうな…。
そしてそのまま、

音も立てずに、唇に新田の体温が触れた。

俺は驚きのあまり思いっきり目を見開いた。

目に飛び込んできたのは、真っ暗な部屋の天井、俺の部屋の景色だった。
「え……？」
俺は辺りを見渡した。
時間は俺が布団に入って十分がたっていた。
俺と新田のあの冒険は、あの時間は、新田といたあの場所は、全部夢だったのだろうか？

「いや、ちがう。」
俺の唇にはまだほのかに体温が残っていた。
新田の唇の温かさが。
顔が赤面してしまう。
「なんて、なんてことを……。」
俺のファーストキス。
そう思うと、急に頭が、顔が冷めていき、急に冷静になってきた。

「新田もファーストキスなんだよな……。」

俺は、最低だ。

新田は俺のことが好きだ、好きな人とのファーストキスはうれしいだろうが、

あいつにとっては、俺が新田のことを好きなのかどうなのか分からない状態でのキスだった。
もしかしたら、俺が新田のことが好きじゃなかったのかもしれない、今頃そう思っているのかも、自分の行動を後悔しているのかも。
ファーストキスは、多分、女子にとっては大切なものだと思う。
新田は多分、好きになってくれた俺とキスをして元の世界に戻りたかったんだ。
でも、でも、

俺は自分の帰りたいからという「わがまま」であいつにキスをするように迫った。

俺はそんなの知らなかった、なんて言い訳に過ぎない。
でも、「同情」でキスをすることになるのも嫌だった。
仮にも、あの後キスをしてくれなかったら、俺はあいつに嘘をつい

ていたのかもしれない
「好きだ」って、面と向かって最低の嘘をついていたかもしれない。
それも嫌だ。

俺があいつの気持ちを偶然にも聞いて、気付いてしまったから、
俺は新田に対して「同情」と「わがまま」、どちらかの感情で接し
なくてはいけなかった。
それしか、選択肢がなかった。
例え、本当に好きになったとしても、それが「同情」とかぶってし
まう。

俺は、新田に最低のことをしてしまったんだ。

あいつは、元の世界に帰ることを嫌がっていたかもしれないのに…
……。

……過去を…悔んだって…仕方がない……。

俺に今できることは…
俺がこれからしないといけないのは……
一体俺に何ができるのか……

今はそれを考えないといけない。

今日も、睡眠時間は取れないようだ。

第五話　ラスト2話です（後書き）

次が最後です。
こんな作品でも最後まで見てくださる方に感謝。
そして、今回はなんだかよく分かんない感じですいませんでした。

最終回ってことなのさ！！（前書き）

最終回です

最終回ってことなのさ！！

俺はいつもの通学路を歩いていた。
結局、俺はなにも思いつかないまま眠ってしまい、さらにはあの世界での寝不足も原因で俺は今、絶賛遅刻中だ。
「はぁぁ。」
あくびとため息の混合した吐息を吐く。
頑張って、頑張って何時間も思考回路を全開にして考えた結果になにも思いつかずじまい、
遅刻までしているのに何一つ思いつかなかった。
俺は何がしたいんだか、

俺のことが好きな新田に対して、俺は何をしてやればいいのか。
「はぁぁぁ。」
今回は純粋なため息だ。頭の中で答えのない暗中模索を繰り返し、そのたびになにも思いつかず、ため息をついている。
俺はもういくつの幸せを逃してしまったのだろうか？
他人から見れば、俺のこの悩みは幸せなんだろうな。
そのせいで幸せが逃げていってるってのはなかなか滑稽……。
なんて考えてる暇なんかないよな。
俺はいつものようにだるそうなゆっくりとした足取りで学校に向かう。

結局、学校にいる間はなにひとつ打開策は生まれなかった。
遅刻の理由を聞かれ、数学の小テストがあり、授業が長く、いつ当てられるのか分からない恐怖を感じて、新田のことを考えている暇はなかった。
新田は今日も学校に来ていたけど、俺は話しかけようともしなかっ

た。
なんだか、今思うとあの世界で起こったことが全て夢だったようにも感じる。
全てが夢で、あんなことはなかった。新田が俺のことが好きだとか、そんなことも全部夢だったんだ。
俺はそう思う。そう思って、俺はこのことから逃げてやる。
なかった、で終わりにしてしまいたい。全部夢で終わらせたいんだ。

下校、昨日（現実世界での）新田がバカ女子どもに絡まれていた橋の上で、俺は川の水面に目をやっていた。
考えていたんだ、新田のことを。
なんでだろう、新田、新田、新田、まるで俺の方が新田のことが好きみてぇじゃねぇか。
……それも、否定できない。
好きなのか、好きじゃないのかが……分からないから、答えを見出すことができない。
「……。」
俺は黙って川から目を離し、また、いつもの道を歩き始めた。
「……。」
いつもの、いつも通りの、ついこの前とは違う、
一切の刺激がない平凡な生活。俺は戻ってきたのに、なんだかちょっとだけむなしい。
「あいつは……どうなんだろうか。」
新田は、今のこの生活に満足していなかったから、あんな世界に行きたかったんだろうか、
俺のことが好きなら、この世界でもよかったのに、ただ、二人でいたかっただけ、とか好きになってほしかった、そんな理由で、それだけでこの世界から離れたいと思うだろうか。
どうせならココと違う世界で幸せになりたい。

そう思っていたんじゃないかな、と推測してみる。
真実なんか、俺には分からない。
それに、あの世界に行きさえしなければ、普通に告白されていたかもしれないし、
逆に俺があいつのことを好きになったかもしれない。
新田にとってはそこが誤算だった。
俺が新田をどう思っているのか、新田は知らないのに、
俺は新田が俺のことをどう思っているのかを知ってしまった。
だから、俺は自分の感情が分からなくなってしまった。
そして、ファーストキスを奪ってしまった。
俺は……。

歩き出すと、俺はデジャブを感じた。
橋を通り過ぎて、ちょっと先の道で、俺は昨日と似たような光景を見た。
「また、絡まれてやがる。」
言う必要性はあるのかどうか分からないが、言っておこう。

新田がこの前のバカ女どもに絡まれていた。

「……。」
俺は、何をすればいいんだ？
聞こえてくる、風に乗って、空気を振動させて四人のやり取りが聞こえてくる。

「お前、さっさと取ってこいよ！」
「……いや……。」

「そこのコンビニで取ってこいっつってんだろ！？」
「……だめ……。」
「早くしろよ！アタシらだって時間ねぇンだよ。」
「……万引きは……ダメ……やらない。」
新田が、一週間一緒にいた時にも見せなかったような顔で言った。
「なるほどね……万引きをやらせようってか。」

「っっ、いい子っぷり見せつけてんじゃねぇよ！！」
叫ばれてビクッとする新田、でも、
「…ダメ、できない。」
新田は目をうるませても決意を曲げなかった。
「あーあーあ、あれか、お前、自分が苦しんでいれば王子様でもくると思ってんの？」
「あっ、昨日のあいつ？はは、ウケる。好きな真貴菜ちゃんの為に川に飛び込むって感じのあいつっしょ？」
そんなかんじでバカどもが俺をだしにして笑ってやがる。新田は顔を真っ赤にして、
「ヱ弐駆……さんは、私のこと好きじゃない……でも、……

私は、好き」
俺は思わず顔を隠してしまう。
午後四時、何分かに、下校中の女子生徒が、俺のことが好きです発言をした。
俺の名前すら知らないようなバカ女子の前で、堂々と、誇らしげに言った。
それを聞いてバカどもは笑う。
そのせいで新田は顔をトマトのように真っ赤にしてしまう。

デスヨネー、そうなりますよね。
「はぁぁ、なんで、俺のことをそこまで好きになってんだよ。」

俺は、新田のことをどう思っているのか分からない。
でも、あいつが俺のことを好きでいることはいっさい揺らぐことのない真実なのだ。
俺が、どうにかできるレベルじゃない。

あいつの気持ちは、俺が嫌いだと言っても揺らぐことは無いだろう。
あんなに堂々と他人に自分の好きな人が言えるのはそれを表しているみたいだ。
ったく、俺の名前出して笑われてんじゃねぇよ。
恥ずかしいだろうが！！
俺は四人の方にむかって歩き出した。

俺は何をすべきか、新田に何をしなくちゃいけないか、
好きになってやる、なんて上から目線のことじゃなく、
好きになる、みたいに未来形でもない。
ただ、知りたい。
新田　真貴菜は一体どんなバカ女か知っておきたい。
……でないと、いくら恥ずかしがっても命が足りなくなってしまいそうだ。
そういうことにしておこう。俺は認めない。認めていない。

「おい！」
俺の声に、バカ三人が振り向く。
新田は顔をうつむかせていたけど、俺の声に反応して顔を上げた。
バカは俺の顔を見た途端に爆笑しやがった。
そんなことはどうでもいい。
俺は新田の手を掴んだ。
「ひぇ！！」

「行くぞ！！真貴菜！！」

俺はそういって新田の手を掴んだまま走り出す。
手をひっぱられて、引きずりまわされるようにして真貴菜がついてくる。
もう、あのバカどもの笑い声が聞こえなくなるくらい離れて、俺はいったん止まった。
そして、真貴菜を見る。
どこまでも、どこまでもかわいい。
本当に子猫かなんかの類に入れられるくらいかわいい。
ただ、前にも言ったと思うが「かわいい＝好き」ではないぞ。
「あ、あのぅ……。」
真っ赤な顔に上目使いの目で俺を見つめる。
「……。」
なんだか、心臓が高鳴ってきた。
「……て、てぇ……。」
て？て？手？？
俺は手を見る。何の変哲の無い左手……。
真貴菜の左手を掴む、と言うより手をつなぐと言った方が的確な右手……。
あれ？……冷静に判断すると……
俺は俺のことが好きな女の子の手を握っているという状態だ。
「べ、べつにいいだろ！！」
……俺は、多分、たまに、たまにだと思うが、自分の意に反したような失言をしてしまうことがあるようだ。
「…うん……。」
真貴菜は、すごくうれしそうに目をうっとりとさせてうなずいた。
それを見た俺はどんな表情（かお）をしていただろうか？
自分の顔なんか見れるわけない、でも、なんだか、分かるような気

がする。

真貴菜がすごくうれしそうに目をうっとりとさせてうなずいたから、

俺は、心のどこかで、多分片隅の片隅の片隅ぐらいで、

言うのも恥ずかしいような気持ちを抱えているのかもしれない、

多分、それが表情(かお)にでていたんだと思う。

最終回ってことなのさ！！（後書き）

よく分からない感じで終わってすいませんでした。
そして、最終回まで見てくださった方々に感謝です。
何となく、こんな感じで書きたいな、とおもって書いたところ、終始、ふわっ、としたソフトな感じの作品になりました。
感想等がありましたらぜひいただきたいと思っております。
次回作も見てくれるような両親を持っている方は、
次回作に期待しておいてください。
本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0281i/

RPG　―あ～るぴ～ぢ～―

2010年11月10日03時18分発行